



『我々の死者と未来の他者 ～戦後日本人が失ったもの』

大澤真幸 著
集英社インターナショナル 刊
定価 1,034円 (本体 940円+税)

「知の地平、を切り拓く社会学者・大澤真幸が「戦後日本社会」をスリリングに解剖する「解体新書」である。

世界はいま「気候変動による生態系の破綻、核戦争による人類の破滅、極端な格差やその他の差別による社会の不安定、監視による自由への脅威」など深刻な危機に直面している。一方でこれらに立ち向かう非暴力の「市民的抵抗」も急増している。にもかかわらず日本だけがその潮流から外れ、「破局への歩みを自らの力で方向転換しようとする市民的抵抗」が極端に少ない。それはなぜか。

本書は、その疑問に答えるべく全6章からなる論考だ。「<死者>を欠いた国民、トカトントン鳴り響く、二段階の哀悼―その意義と限界、仮象としての大衆、青みどろだけがいた、スロウ・ボートは中国に着いたか」と続く見出しが謎めく。しか

し、ロジカルな本文に分け入って引きつけられた。司馬遼太郎、村上春樹、小林正樹、太宰治、大岡昇平、加藤典洋、鶴見俊輔、吉本隆明らの作品世界に踏み込み、『鬼滅の刃』『虹色のトロツキー』などのマンガ作品を動員して「我々の死者」（過去）と「未来の他者」（未来）から分断されたこの国の「現在」を切り捌く筆鋒が鮮やかだ。

日本人は自分たちの死後に生きる「未来の他者」にほとんどコミットしていない。それは日本人が「すでに存在しない」他者、「過去の他者」、言い換えれば「我々の死者」を喪失しているからだ。ゆえに「我々の死者」を取り戻す。そのためには「我々の死者」の「回復」(=「棄却」)を同時に成し遂げ、「未来の他者」と接続する。「過去を新たに見出すこと」は「未来を変えること」と「同じことの二つの側面」にはほかならないと説く。その鋭利なロジックがリアルに迫ってくる論考だ。 (山海野 玄)